

## チェコ・スロヴァキアの野外博物館についての一考察

村越 信子

A Study of "Open Air Ethnographic Museum" in Ceska and Slovenska

Nobuko MURAKOSHI

### はじめに

民族や民俗に関わる展示は、人類の長い歴史すべてに関わって存在するので、そのための資料となるものは莫大な量であり、多様性をもっている。規模の小さな日常的な生活用具から家屋といった館内には展示が困難なものまで大変幅が広い。

野外博物館に展示する場合でも基本的には、館内展示も館外展示も変わるところはない。野外展示には、その企画の内容や規模の大きさ形態などから、博物館の敷地を利用した野外展示と自然環境を包み込んだ敷地を利用して展示をする野外博物館とがある。

今回焦点を当てたのは、ヨーロッパの中央に位置しているチェコ共和国とスロヴァキア共和国の野外博物館である。1993年1月1日にチェコスロヴァキアは解体したが、両国は長い歴史を刻んできた。その殆どの時代において他国に侵略され続け、数々の悲哀を体験してきた。

チェコ共和国は、(1) プジェロフ・ナド・ラベム (Prerov nad Labem) (2) ロジュノフ・ポド・ラドホシュテム (Roznov pod Radhostem) (3) ストラージュニツェ (Straznice) 野外博物館の3館。

スロヴァキア共和国では、(1) チチマニ村 (Cicmany) (2) マルティン (Martin) (3) ルボフニアンスカ (Lubovnianske) (4) バルデヨフ (Bardejov) (5) バンスカー・シュティアヴニツァ (Banska Stiavnica) 野外博物館5館の实地踏査を通じ歴史をふまえ、両国の野外博物館について考察を進める。〔地図1〕

### 1. チェコ共和国の野外博物館

チェコには、民族の音楽、衣装、舞踊など民俗的伝統を継承していくために、国際フォークロア・フェスティバルを開催したり、数百年の伝統をもつ色彩豊かな家具、刺繍、木彫製品、ガラス絵、陶器、玩具などの民俗文化の技術を大切に伝えていこうとする意識がある。

特に民俗建築群は、文化遺産として登録したり、代表的なものは野外博物館に展示している。これらを保存、保護、伝承していく大きな原動力になっているのが、今回とりあげた野外博物

館である。

(1) プジェロフ・ナド・ラベム野外博物館

プラハ（Praha）から東へ30kmほどの近郊に位置する民家の野外博物館である。主に中央ボヘミア東部に残っていた古い民家を移築して1967年に開館した。〔写真1〕

「ボヘミアの木造建築を保存しよう」という動きは1900年から始まった。当時ボヘミアはオーストリア＝ハンガリー二重帝国に属しており、19世紀末はプラハでもアールヌーヴォー建築がもてはやされ、次々に美しい建物ができていた。粗末な木造の家などは惜し気もなく取り壊されていった。そんな中で古い建物保存の動きが起こったのである。

広々とした野外博物館の敷地内には、古い美しい民家が点在している。オープン当初はわずか6軒しかなかった家屋も、32軒の民家や農家納屋、職人の家、学校など充実した展示内容になっている。その他に養蜂用の巣箱、井戸、墓石、十字架像など建物以外にも展示されている。どの建物の内部にも、その時代の人々の人形が各々のポーズをとり、まるで蠟人形館のようである。

門を入った右側の丸太小屋がチケット売り場でパソコンを叩いてチケットを作成する。その室内の一角にこじんまりとしたミュージアムショップもある。まず構内で一番大きな建物は、



〔写真1〕



〔写真2〕



〔写真3〕



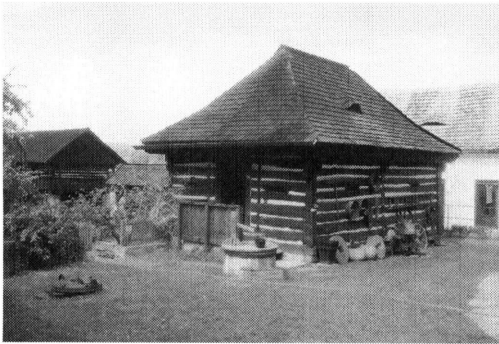
〔写真4〕

1770年に建てられた樽職人の家である。〔写真2〕棟木をつなげ、途中を間仕切り壁で支えた構造は、かなり高度な木造建築であることがうかがえる。この建物は大変大きかったことから、1849年から1883年まで学校として使用され、内部には教師や生徒たちが生き生きとしたポーズをとって、当時の授業風景を再現している。〔写真3〕

一番古い民家は1730年の建物である。その建物の居間と小部屋の間に出入口の土間（玄関）をとった三室並列型になっている。〔写真4〕中世の頃は、暖炉を兼ねて竈は居間の中に置かれていたが、煙が充満したりする不都合があり、次第に台所が独立し、この民家は玄関の奥に配置されている。この野外博物館がある中部ボヘミア地方の建築文化を伝えたのは、主にスラブ系の民族であった。太い断面の木材を積んで壁を造り、焦茶色と白に塗り分けている。〔写真5〕

北東の端に建っている大きな納屋は、1782年の穀物倉である。建物の1階は、上げ底式で屋根を大きく張り出してバルコニー部分や1階の干し草などに雨がかりにくくしている。二階の外側から出し入れできる納屋は珍しい。〔写真6〕

民家の部屋では、7名の女性がテーブルを囲み、テーブルの上にはティーカップと焼き立てでらしいパイが置かれて、談笑風景が見られる。〔写真7〕室内の壁にはキリストの磔刑像や柱時計、刺繍を施した小さなタペストリーなどで飾られている。装飾模様が描かれた収納戸棚



〔写真5〕



〔写真6〕



〔写真7〕



〔写真8〕

や糸紡ぎ、角には清潔な布団がおかれベッドもしつらえてある。〔写真8〕

その他の民家は、洗濯屋、箆編み細工屋、仕立屋、靴屋などで、内部は仕事場を再現してある職人の家々が並ぶ。室内に設置されている道具類は、見学者が手に取って見ることができる。洗濯屋には、手動式ロール状の乾燥機が何台も設置してあり、活気のある仕事場であったことが伺える。〔写真9、10、11、12〕

ヨーロッパでは、今日でも日常生活はテーブルクロス、ナプキン、ベッドシーツ、枕カバーなどしみ一つ無く良くクリーニングされ、アイロンも気持ち良くかかっているのが印象的だが、伝統的な生活習慣であろうと思われる。

小さな小屋にカラフルなドア。これは養蜂用の蜂の巣箱である。〔写真13〕構内は手入れが行き届いており、色とりどりの花々も咲いている。決まった指示コースは示されていないので、自由に散策を楽しみながら見学する。



〔写真9〕



〔写真10〕



〔写真11〕



〔写真12〕



〔写真13〕



(2) ロジュノフ・ポド・ラドホシュチェム野外博物館

チェコ第2の都市オロモウツの東75kmほどにある小さな町だが、公園の一角にこの博物館がある。野外博物館としては中央ヨーロッパでは最も古く1925年に開館した。この年、"ワラキア年"と呼ばれる盛大な民俗学的な祭りが行われた機会に建設された。〔写真14〕

朝晩は人通りが多くなるメインストリートに面したところに公園の入口がある。緑の濃い公園の中を5分ほど進むと野外博物館である。〔写真15〕

構内は、a「Little Wooden Town」(小さな木の町)、b「Water Mill Valley」(水車の谷)、c「Wallachian Village」(ワラキア村)の3区画に分かれている。

a 最も古い時代であり、19世紀後半中心である。"小さな木の町"には農場の管理人の家、〔写真16〕 小さな木の教会、〔写真17〕 宿屋や小さな民家などで集落を構成して、当時の庶民の生活ぶりを伝えている。

b "水車の谷"には、水車の各種の技術を復元し、織物や毛糸を紡ぐ毛織物機、製材機械、圧



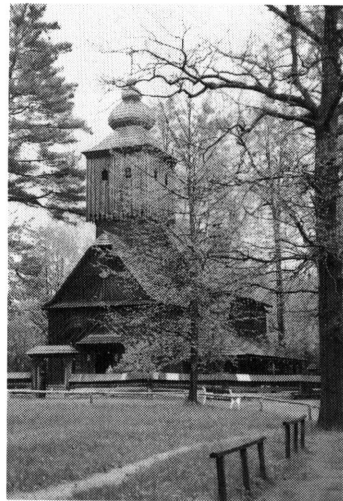
〔写真14〕



〔写真15〕



〔写真16〕



〔写真17〕

搾機、ハンマーミルなどがあり、水の力を如何に上手に活用されていたかが良く理解できる。  
 c "ワラキア村" は博物館で最も広いスペースを占めており、1962年以来、毎年のように典型的な田舎の民家が移築されたり復元されたりしている。また、この地区では実際に、馬や牛、羊や鶏などが飼育されていて活気がある。さらに伝統的な料理を味わうこともできるシステムになっている。野外博物館として上手に生きた教育普及活動を果たしている。

### (3) ストラージュニツェ野外博物館

この博物館は、チェコの東側をしめるモラヴィア地方の南に位置している。ここはオーストリアとスロヴァキアとの国境に近い。ローマ時代の城壁をくぐって、メインストリートを抜け角々にある道路標識に誘導されて進むと、目的の博物館である。〔写真18、19〕その道路標識の矢印には『SKANZEN』と記されている。『Muzeum v prirode ve Straznici』正式名称よりも『SKANZEN』が一般化しているようだ。



〔写真18〕



〔写真19〕

スカンゼンというと、スウェーデンにアルツール・ハセハウス（Artur Hazelin）が1891年に創設したスカンセン野外博物館を思い出す。

古くは、砦の意味で、王室の狩猟場や別荘地となったところである。素晴らしい自然に包まれた広大な敷地に17世紀の沈没船をそのまま保存しているバーサ号博物館、スウェーデン最大の北方博物館、そして民族博物館や歴史博物館などを開館し、文教地区を形成しているところである。

約100年前、民俗文化財の調査、研究、保護と教育普及活動がなされたことは、創設者のアルツール・ハセリウスの功績は多大である。こうした思想は現代では世界各国に大きな影響を及ぼし、言語の違いを乗り越え『スカンゼン』という言葉で野外博物館ととらえるのである。

このストラージュニツェ野外博物館は、1973年Dr.ヤニ・クリストによって城の跡地を利用し計画的に開発が始められたようだが、1981年オープンとなった。

10時開門である。30分毎に1グループになり、解説員に引率され構内を廻って歩くシステム

である。〔写真20〕

現在は、1. モラヴィア地方 2. 森林地帯 3. 水動力を備えた建物 4. ブドウ園 5. 牧場、農園 6. 高原 以上、広大な土地の自然を上手く取り入れ6つのエリアで構成され、その中を更に目的別に、B、C、D、E、Hと分けている。大きな標識が建てられ、誰でもその区分が分かるようになっている。〔写真21〕

森の多いボヘミアと比べ、ここモラヴィア地方は、大地の広がるのんびりした酪農地帯である。古い伝統に培われた生活文化が、民家の造形に現れている。〔写真22〕 正門を入った最初のBゾーンに点在する民家は、どれも藁葺屋根である。どの建物もこじんまりとしたもので、四角錐に近い屋根の構造である。屋根の角には、藁をまとめ筒状にしたものを取り付け、藁葺といえども重厚さを感じる仕上がりになっている。壁面は、校倉風に太い角材を用いその上に石灰を塗って仕上げてある。〔写真23〕

Cゾーンには、日干レンガを積み上げた壁造りで、屋根は、ヒノキやマキの板を薄くした柿<sup>コ</sup>葺<sup>ケラ</sup>となっている。窓枠は、白くペンキを塗って、屋根や壁面の焦茶とのコントラストを強調し



〔写真20〕



〔写真21〕



〔写真22〕



〔写真23〕

ている。〔写真24〕

Eゾーンの民家の内部には、収穫したブドウを絞る特大の機械が設置されている。藁葺屋根に真っ白な漆喰壁、出入口の上には、草木をモチーフにした模様をカラフルに描いてある。この手法は、街中の家並みにも見ることができた。〔写真25〕



〔写真24〕

Hゾーンにある民家は、白壁の下部50センチほどが青く塗り分けてあった。湿気除けか、虫除けの役目を果たしているらしい。藁葺屋根や柿葺きなど入り交じっていたが、大型の家屋は、殆ど柿葺きであった。〔写真26、27〕



〔写真25〕



〔写真26〕

## 2. スロヴァキア共和国の 野外博物館

スロヴァキアは北海道の3/5ほどの面積をもつ小さな国であるが、北部はポーランド国境にまたがるカルパチア山脈から連なるタトラ山地が横たわっている山国である。風景は荒削りで厳しく、唐桧をはじめとする針葉樹林が多く、従って木造建築が発達し、民家をはじめ教会など美しい木造建築がみられる。人が住み生活するものであるが、見て楽しみ心に喜びをもたらし、芸術品に値するものが多い。



〔写真27〕

雄大な自然に恵まれたスロヴァキアの木造建築群について、調査を進めるにしたがい興味が一層深まっていく。

### (1) チチマニ村博物館

ドナウ河に面したスロヴァキアの首都ブラチスラヴァから北上し、ゆったり流れるヴァー川

の溪谷を200Kほど進むと、かつて交通の要衝ジリーナ（Zilina）に着く。さらにこの町の南の方向へ50kmほど山の中を登り詰めるとチチマニ村である。標高約800mの高地に広がる200戸ほどの集落である。

フス戦争（15世紀）以降の宗教の弾圧が、この山奥へと多くの人々を追いやった。第二次世界大戦末期にも、チェコスロヴァキア側のパルチザンがここに立て籠り、ロシア軍とともにナチと激しい戦闘を繰り広げた所でもある。13世紀頃からすでに人が住み着いていたというこの村だが、1923年の大火により、大半が消失し、修復したり復元したりして、今日の家並みに至っている。〔写真28、29〕



〔写真28〕



〔写真29〕

道を挟んで両側の二軒の民家を使い、この村の様々な歴史を伝えるため特に博物館にしている。しかし、この集落全体が、野外博物館としての機能をすべてもっているの、あえてチチマニ村博物館としてとりあげた。

チチマニ村の民家は、固い針葉樹の校倉造りである。二階建ても三階建ても何軒か保存され、見事な家並みをつくり上げている。屋根は独特の寄せ棟で、隣接しているポーランド南端の古民家によく似ている。〔写真30〕

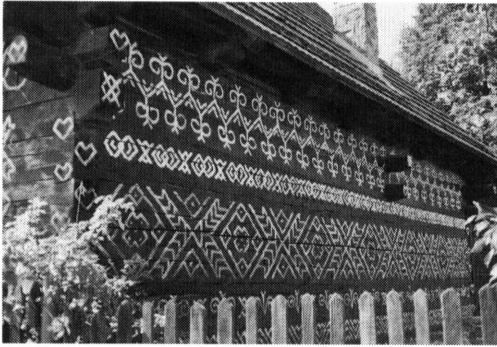


〔写真30〕

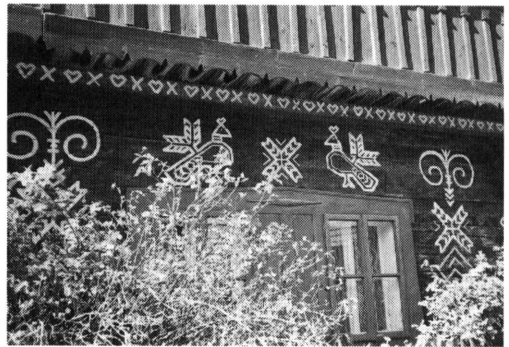
チチマニ村を特徴づけたのは、全ての家々の壁面に描かれている模様である。太い筆と石灰を使って、細かなパターンを横や縦に並べて描かれている。〔写真31、32〕

モチーフは♡○×⇒その他、羊の角のような模様、連続した波形、幾何学模様など自由奔放に筆を走らせていて、複雑かつはなやかな図柄である。黒色や焦茶の板壁にくっきりと浮き出している。窓は校木の間に小さく開けられている。ガラスがはめられているが、古いものは板戸で、扉の中央には大胆な図柄が描かれているものが見られる。





〔写真31〕



〔写真32〕



〔写真33〕



〔写真34〕

図柄については、家ごとに何度も書き直しているうちに、個性的なパターンができたのか、これらの伝統ルーツは、民族学的にも明らかにされていない。

## （2）マルティン野外博物館

チチマニ村から北東方向にマルティンという小都市がある。唐松林に囲まれた郊外の丘陵地帯に、数少ないスロヴァキアの国立博物館がある。〔写真33〕最近まで復元工事が進められ、現在はほぼ完成している。

駐車場より森の中を散策しながら200～300mほどで入口である。〔写真34〕夏の終わりには、キノコ狩りを楽しむ人々の姿が森の中に見られ、そんな自然に恵まれたところである。

入口を抜けると、一気に視界がひらけ青空のもと陽射しが眩しいばかりである。広大な敷地の中は、19世紀後半を中心に、地方別に移築復元されている。

現在は母屋、厩舎、納屋、穀物庫、教会など50余棟が点在している。その他、蜂蜜小屋や、日本流でいえば『道祖神』に近いものも道端に設置され、生活の場を再現するために、一役かっている。〔写真35〕牧草地を進み左手へと下っていくと集落がある。

マルティンの北を東西に流れるヴァー川の支流オラヴァ川流域に広がるオラヴスカ地方の家並みを例に取ってみたい。オラヴスカ地方は30kmほど北東へ進むとポーランドとの国境になる



地域である。

オラヴスカ地方の民家は、一軒が大変大きいのが印象的である。〔写真36〕削ぎ板葺きの校倉造りで、室内側は角材に加工してあるが、外側は丸太のままである。母屋につくように（寄り添うように）同じ大きさの厩舎が建っている。厩舎の中は、牛、豚、鶏などの家畜小屋と農機具の倉庫としてのスペースがとってある。

母屋はチェコの東部ボヘミア地方にも見られた、三室並列型である。中央の玄関を入ると、その奥が貯蔵室になっている。玄関を挟んで右側はスモーク室、左側は居間兼寝室として使われている。室内は石灰塗りの白壁である。床はたたき（三和土）である。その一角にフード状のものが設置され、放熱壁になっているので暖房の役目も果たしていると思われる。〔写真37〕鍋や壺、皿など調理器具が装飾的に飾られ、日常生活に使われる様々の道具がおかれている。反対側には、食卓用テーブル、椅子、ベッドがおかれている。このベッドは子供用かと思われるくらい比較的短い。しかし、枕を幾つも積み重ねてリクライニングシートのように寝るらしい。美しく刺繍を施した寝具類が置かれ、生活する人の潤いすら感じさせる。

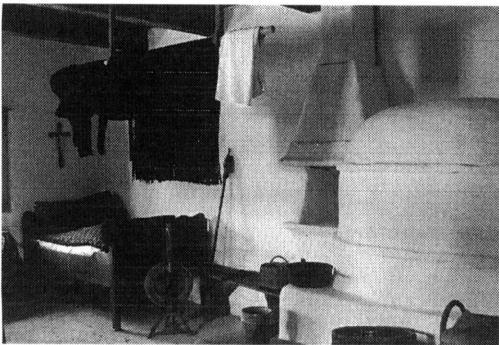
民家の特徴は屋根である。妻側の破風の上端に半円錐形の小庇がつき、この地方独特の飾りがつく。〔写真38〕一説によると教会のない山村では人々に急を告げる鐘をここに吊るしたところから、このモラヴィア特有の形が生まれたらしい。すべて木地のままで彩色はしていない。



〔写真35〕



〔写真36〕



〔写真37〕



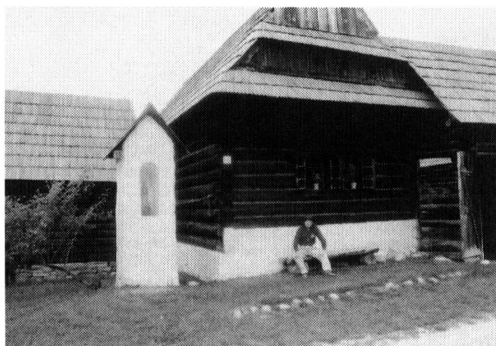
〔写真38〕

ヴェリスナ村付近の民家は前面が主棟で、後方が厩舎である。厩舎の通路側と母屋の2階の一部が寝室になっている。厩舎の外廻りは、石灰仕上げである。同様の造りの家であるが切妻造りの民家もある。〔写真39〕

フルスチン村付近の家並みは、傾斜地なので地下室のついた家が見られる。母屋は同じ三室並列型である。この家は屋根や壁面は白木のままだが黒ずんでいる。地面に近い部分の腰回りの高さは石灰塗りである。屋根の頂点には特徴となっている半円錐形の小庇の削ぎ板がついている。〔写真40〕




〔写真39〕



〔写真40〕

### （3）ルポフニアンスカ野外博物館

チェコもスロヴァキアも野外博物館についての事前調査が大変困難な国であった。所在地すらつかむことが出来なかった。唯一の資料としてミシュランの1/60万の地図から野外博物館のマークを探し出す作業から始まった。チェコには6ヶ所、スロヴァキアには7ヶ所の野外博物館マークが確認できた。実地踏査においても所在地が分かりにくく、辿り着くのに特に一番手間だったのがこのルポフニアンスカ野外博物館であった。

タトラ山地のルポピナ付近を走るルート77の道路は、ポーランドの国境線とほぼ平行している地域で、スターラ城の麓に造られた野外博物館であった。博物館と合わせて城見学もし易い共通券が準備されていた。

入口を入ると立派な事務所があり、ミュージアムショップもその一角にある。解説員が常駐している。事務所の正面に、三つのネギ坊主の塔のある木造教会が建っている。スロヴァキアには、ほぼ村に一つはこの素朴なバロック風の木造教会が見られる。〔写真41、42〕

まず解説員の案内で木造教会を見学、説明がある。続いて博物館の概要などについての説明があった。スロヴァキア語の他、英語、ドイツ語での簡単な解説もあった。教会を出ると、一面の牧草地に民家が点在していて、のどかな村の風景が再現されている。見学者によって道がつけられた牧草地の上を一步步踏み締め、一軒ずつ訪ねていくのである。建物はどれも付属家屋はなく独立家屋である。チロル地方で見かける、ベランダを一周めぐらした装飾的な二階



〔写真41〕



〔写真42〕



〔写真43〕



〔写真44〕

建てや丸太の校倉の家も多い。校木と校木の間を漆喰で埋めて、白い線を浮き出させ窓枠に色を付けた家が特徴的である。〔写真43、44〕

北ボヘミアに多いこの民家の造りは、密着型の加工がしにくい広葉樹のための便法である。内部の壁も外壁と同じく丸太と丸太の間は、漆喰で埋めてあるのが普通である。壁に祭壇や宗教画が飾られるように丸太を平にして、全体を白壁にしている家もある。戸棚やベッド、揺り籠などの家具類には、美しい刺繍細工のものが置かれ、目を楽しませてくれる。祖母から母へ、母から娘へ受け継がれたモチーフなのかもしれない。〔写真45〕

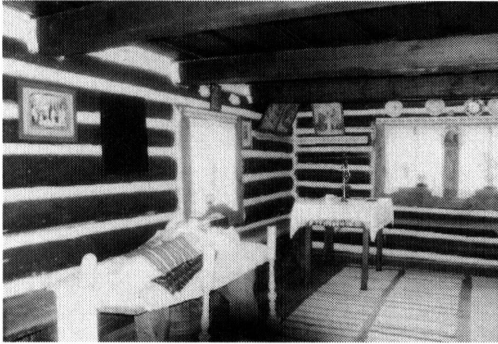
やや大きな民家は、学校である。三室並列型で一番大きい部屋は教室として使われ、一番小さな部屋は教材や資料などを収容する部屋で、地球儀や絵巻物などが置かれている。もう一つの部屋は教師の宿舎となっている。珍しい家は、葬儀屋の建物である。棺も上等、並みなど、各種サイズが展示されていて、『揺り籠から墓場まで』と、生活全般を紹介



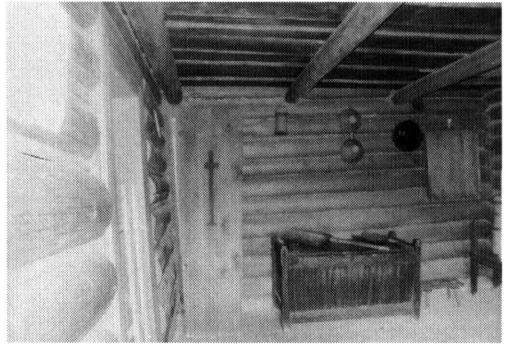
〔写真45〕

している。〔写真46、47〕

傾斜地にあるので、ほとんど土台は石（コンクリート）造りである。構内にはレストランも併設されていて、郷土料理を楽しみながらゆっくりできる。



〔写真46〕



〔写真47〕

#### （４）バルデヨフ野外博物館

城壁に囲まれたバルデヨフの町から4 kmほどの郊外には、自然環境を十分に生かした庶民の憩いの場となっているクワパーク（温泉保養地）がある。メイン道路から脇道へ入ると大きな並木道が続き、しばらく進むと巨大な駐車場が現れる。クワパークの入口である。車はここでオフリミット。広大な敷地には、療養所、飲泉所、図書館、ホテル、ショッピングモール、そして野外博物館の施設がある。ここの野外博物館は、森の一番奥まった一角に位置を占めている。クワパークに長期滞在している人々にとっては、野外博物館へ足を運ぶことは、心のケアになりクワパークの目的達成に役立っていることだろう。〔写真48〕

博物館の受付で入場料40SK（140円）カメラ使用料金50SKを払う。広くはないが21の建物が移築されている。歩き出すと三叉路にぶつかり、ここに聖人を祀った大きな祠が我々を迎えてくれる。〔写真49〕真正面に見えるのが、スロヴァキアで最も古い（1776年）というツボイ

教会である。〔写真50〕木造教会が集中しているバルデヨフ地方に多い、レムク型という三つの校倉のブロックが東西に並ぶ正教の教会である。

屋根は板葺きで、内部は黒ずんだ板壁に聖書の物語や聖人たちが、色彩豊かに描かれている。〔写真51〕荘厳な雰囲気醸し出している。

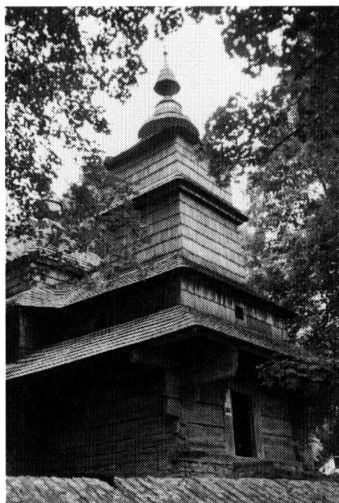
ツボイ教会を出て、順路に従って進むと農家、穀物庫、家畜舎、作業所などが続く。作



〔写真48〕



〔写真49〕



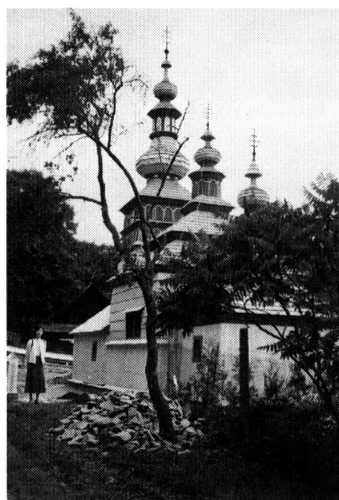
〔写真50〕



〔写真51〕



〔写真52〕



〔写真53〕

業所の一角に足を運ぶと、真新しい木の香りと鉋屑の山積。それには「Nizuy Koodarnik Mikulasov」と書かれ、先に見学したツボイ教会と同じレムク型を建築中であった。三つのネギ坊主の上には（十字架）も置かれ、一部に彩色が施され、白木とのコントラストが美しい。建築中なので、屋根の板葺きの構造などを見学することができた。近日に中に建物を覆うネットも外され見事な姿を現すことだろう。〔写真52、53、54〕

#### （5）バンスカー・シュティア アヴニツァ野外博物館

バンスカー・シュティア  
ヴニツァの町は、12世紀初めて文献に登場し、15世紀半ばにはハンガリー王国の最も重要な鉱山都市になった。最盛期の喧騒はなく、現在はひっそりとした山間の穏やかな町である。

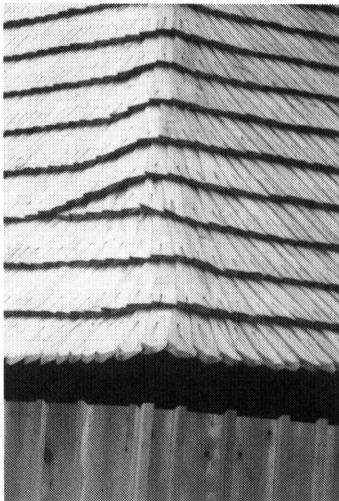
トルコ軍の侵攻に備えて建設された新旧二つの城や門を囲む防御形式も残っていて、その歴史的町並みと周辺の鉱山跡地を含めて、世界遺産に登録されている。新旧二つの城内は、博物館になっているが、目的の野



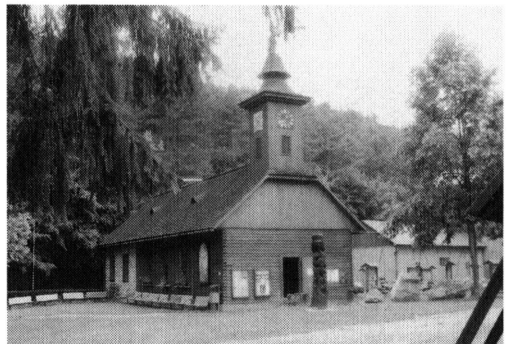
外鉾山博物館は新城から南へ進んだところに開館している。

ここはグループ単位になって、ガイドの案内で坑道へと進む。あいにく人数が集まらず、坑道内の見学はできなかったが、案内所には〔写真55〕貸し出し用のヘルメット、コート、大型懐中電灯など重装備が備えられていた。説明はスロヴァキア語のみだが、英語版の小冊子が用意されていた。見学は一時間強で、17～19世紀の盛んだった頃の採掘の様子や工具、掘り進む様子が展示されている。

木造教会風の案内所のある敷地内には、採掘された数々の鉾石が展示され、その横には、解説板が付いている。その他、鉾山の最盛を再現するかのように傾斜地を利用したトロッコを設置し、加工する仕事場もある。〔写真56、57〕坑道内見学が無理な高齢者や足の不自由な方、時間のとれない人でも鉾山博物館の機能を十分読み取れる工夫がされている。



〔写真54〕



〔写真55〕

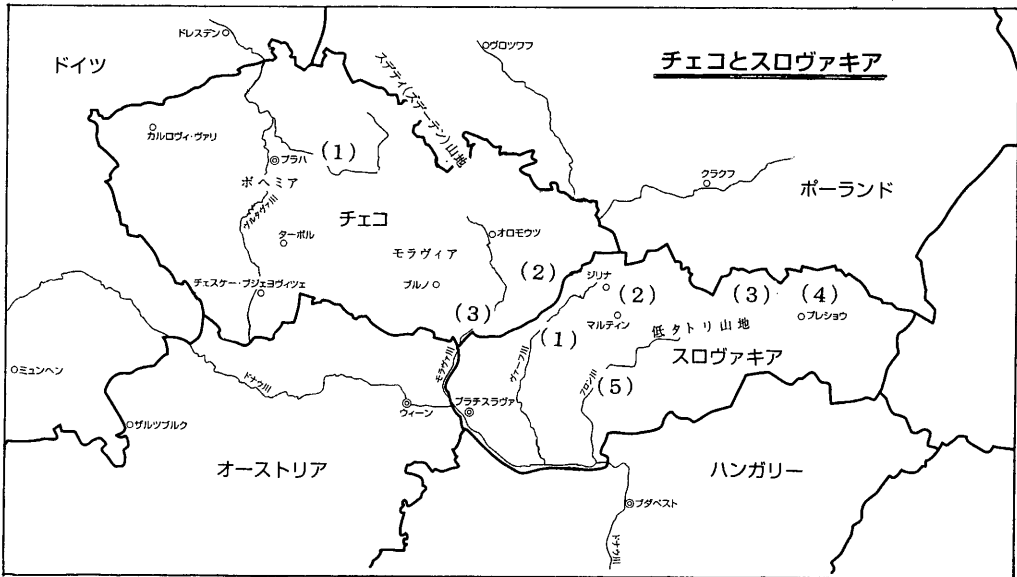


〔写真56〕



〔写真57〕





[地図1]

## まとめ

チェコ共和国は日本の1/5、スロヴァキア共和国は北海道の3/5ほどの国土である。両国の野外博物館を通じて理解できた、大きな特徴として次の3点があげられる。

第1点は … チェコのモラヴィア地域は、母屋は三室並列型で、その次に納屋や畜舎が建てられている。住居の屋根の妻側上端にククラと呼ばれる半円錐形の小庇が特徴となっている。A字形をした合掌造りは、ドイツからの移民の影響が著しい。民族共通の血のつながりを感じる。

第2点は … スロヴァキアの子チマニ村は、民族学的にも最も興味のある集落である。校倉に独特の白い文様を描く造形を、今でも伝統を受け継いでいるのである。その蔭には、政治、宗教の対立があり、肥沃な地を追われた先人の悲しい逃避と、団結の歴史があることを忘れてはならない。

第3点は … スロヴァキアの東端バルデヨフ周辺には、レムク型と呼ばれている木造教会が集中している。その大部分は、三つの校倉のブロックが東西に並ぶ正教の教会である。東の端（祭壇のあるところ）は、巧みに八角形の内陣でまとめている。外観からの地味な印象とは異なり、教会内部は聖人を中心にした沢山のイコン画で壁面が埋め尽くされ、今日でもロウソクの炎が消えることなく灯され、信仰の篤さが如実に感じられる。

バルデヨフからポーランド国境へ向う地域には、集落ごとに木造教会が建っていて、多くのものを見学できた。その全体が木で造られている木造教会は、どれも素晴らしい造形の力強さを誇っている。特に、バルデヨフの野外博物館に保存されているツボイ教会の全体のシルエット

トと板葺き屋根の質感はスロヴァキアの木造教会の真価を十二分に発揮している。

## 結び

チェコ共和国で3館、スロヴァキア共和国で5館の野外博物館を実地踏査できたことは、短期間にもかかわらずチェコやスロヴァキアの民族の一端を理解するのに大変有効であった。

チェコスロヴァキアは第一次世界大戦（1918）と第二次世界大戦（1945）の間、波瀾万丈の大陸のど真ん中にあったが、比較的安定と民主主義を守った国である。1918年第一次世界大戦にオーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊したため、チェコスロヴァキアが独立を宣言したが、国内のいろいろな民族の間の反目、不安定な隣国の存在などが重なり、再び苦難な道を歩むことになった。

チェコスロヴァキアの地形の大部分は、ハッキリとした四季があり、どの季節も美しく気候も穏やかで従順である。森は下生えの灌木がなく、こざっぱりとしていて森の中も散歩しやすい。山岳地帯もスイスアルプスのように高過ぎず鋭い峰も少なく、近寄りがたいほどの風景ではない。歴史的にみて大きくはチェコ人の住むボヘミアとモラヴィア、スロヴァキア人の住むスロヴァキアの三つの地域に区分される。そしてチェコスロヴァキア人は、他のスラブ民族より重厚で陽気さがあり、野性的な情熱もち、反対に残酷さはない民族といわれている。

これらの特徴を持って、作り上げた民族の歴史を野外博物館で堪能することが出来た。さらに野外博物館は展示をするだけでなく、1年を通じて博物館の敷地内を有効利用し、様々なしきたりに則った祝典や祭事を開催している。民族の伝統を保存伝承し、教育普及に力を入れていることが十分読み取れる。そして所によって姿、形を変え、来館者の心を和ませる。そこには古い伝統に培われた重厚な生活文化、手造りの造形によって受け継がれた豊かな空間の感性が表現されているからであろう。自然に対する敬意と自然の厳しさに立ち向かい切磋琢磨しながら作り上げたものが刻み込まれていた。

## 参考文献

- 1) 薩摩 秀登編著：チェコとスロヴァキアを知るための56章 明石書店 2003年
- 2) 沖島 博美 他：旅名人ブックス プラハ・チェコ 日経BP出版センター 2002年
- 3) 太田 邦夫：建築巡礼「ヨーロッパの民家」 丸善（株） 1988年
- 4) 川島 宙次：絵でみるヨーロッパの民家 相模書房
- 5) 太田 邦夫：ヨーロッパの木造建築 講談社 1985年